

# EBPMの試行的検証 モデル事業(ICTの活用)

## 取りまとめ

---

「情報通信技術を活用した教育振興事業のうち 情報教育の推進等に関する調査研究」(文部科学省所管事業)

「次世代施設園芸拡大支援事業」(農林水産省所管事業)

「IoTを活用した社会インフラ等の高度化推進事業のうち 製造分野:スマート工場実証事業」(経済産業省所管事業)

- ・ EBPMの実施に当たっては、この問題の解決が必要なのか、何を目的として行う事業なのか、事業が目的達成のための手段として有効か、これらを事業の目的・手段の合理的な関係を説明するロジックモデルやこれをサポートするエビデンスを用いて精査することが必要である。また、事業実施により直接コントロールできる範囲を「アウトカム」、事業実施のみでコントロールできず、その他の影響が介入する社会的な変化等は「インパクト」とすることが一つの整理であり、この点を踏まえてロジックモデルを作成することが重要である。
- ・ モデル事業では、課題を明らかにした上で、解決策としての仮説を設定し、事業を実施する中で得られた情報・データをもとに仮説が正しかったかを検証することが必要である。その際、仮説や変数を操作するための選択肢がどのような根拠に基づき選ばれたのか確認できるよう、情報を記録・保存するとともに、その情報を公開することも重要である。また、モデル事業にはモデル実施後の政策の決定と本格展開の

ために何らかの情報・データを収集するという側面があるので、どのようなものの収集を目指すかをまずは整理したうえで、十分に収集可能な事業設計とすることが必要である。

- ・ 事業の成果を社会に普及していくためには、まずは、モデル事業の成果を十分に検証することが必要である。また、どのような指標によって評価を行うかについては、指標に関するデータの収集方法を含め、事前に決定しておくことが必要である。なお、モデル事業の成果検証の結果として「有効ではない政策」が判明することもあるが、それは、モデル事業の成果としてプラスと捉えるべきであり、その場合、当該モデル事業の問題点をしっかりと分析し、その結果を当初想定された課題の解決や他のモデル事業の設計の際に活用していくことが重要である。さらに、検証された成果をもとに実施する普及段階については、モデル事業実施後のPDCAサイクルに属するものとして、モデル事業とは区別して考えることが必要である。
- ・ ロジックモデルの設定と合わせて、エビデンスの信頼性の検証を行うことが必要である。また、収集した情報・データの有意義な分析を行うためには、例えば、モデル事業の対象先と対象先以外の比較による事業効果の識別、モデル事業の対象先において一部の条件を固定化した上で他の条件のみ変更することによる対象先間での差異の把握といった取組を行うことも必要である。
- ・ 客観的データの取得が難しい分野もあるが、そのような分野においても、まずは、客観的データが本当に取得できないかを検証することが必要である。その上で、客観

的データの取得が困難な部分があれば、客観的データに代わる検証方法をしっかりと検討することが重要である。また、客観的データの取得が困難な場合は、モデル事業実施の必要性自体も含めて十分に検討することが必要である。